眠る森のお姫さま

ペロー
楠山正雄訳

一

むかしむかし、王様とお妃がありました。おふたりは、こどものないことを、なにより悲しがっておいでになりました。それは、どんなに悲しがっていたでしょうか、とても口ではいいつくせないほどでした。そのために、世界じゅうの海という海を渡って、神様を願（がん）をかけるやら、お寺に巡礼（じゅんれい）をするやらで、いろいろに信心（しんじん）をささげてみましたが、みんな、それはむだでした。

でもそのうち、とうとう信心のまことがとどいて、

お妃に、ひいさまの赤ちゃんが生まれました。それでさっそく、さかんな洗礼（せんれい）の式をあげることになって、お姫（ひめ）さまの名づけ親になる教母（きょうぼ）には、国じゅうの妖女（ようじょ）が、のこらず呼び出されました。その数は、みんなで七人でした。そのじぶんの妖女なかまのならわしにしたがい、七人の妖女は、めいめい、ひとつずつ、りっぱなおくりものを持って来るはずでした。ですから、生まれたときから、お姫さまには、もうこの世でのぞめるかぎりのことで、なにひとつ身にそなわらないものはなかったのでございます。

さて洗礼式がすんだあと、呼ばれた七人のなかま一

同が、王様のお城にかえりますと、そこには、妖女たちのために、りっぱなごちそうのしたくが、できていました。ひとりひとりの食卓（しょくたく）の上には、お皿（さら）や杯（さかずき）の食器（しょっき）がひとそろいならべてあって、それは、大きな金の箱にはいっている、さじだの、ナイフだの、フォークだので、このこらずが、ダイヤモンドとルビーをちりばめた、純金製（じゅんきんせい）のものでした。

ところで、みんなならんで食卓（しょくたく）についたとき、ふと見ると、いつどこからやって来たか、たいへん年をとった妖女がひとり、のそのそと広間にはいって来ました。けれどこの妖女は、この席に呼ばれてはいなかったの

です。

というわけは、このおばあさんの妖女は、今から五十年もまえ、ある塔の中にこもったなり、すがたをかくしてしまって、もういまでは、死んでしまっているか、魔法にでもかけられて、なにかかわったものにされてしまった、とおもわれていたからです。

王様はあわてて、この妖女の前にも、ひとそろい食器を並べさせました。でも、それはもう、大きな金の箱に入れた純金製のものではありませんでした。なにしろお客は七人のはずでしたから、七人まえのしたくしか、できてはいなかったのです。するとおばあさ

んの妖女は、じぶんだけが、けいべつされたようにおもって、口の中で、なにかぶつぶつ、口こごとをいっていました。

　そのとき、ほかの若い妖女のひとりが、そばにとなりあわせていて、おばあさんのくどくどいうことばを、そっと聞いていました。それで、このおばあさんが、王女になにかよくないおくりものをしようと、たくらんでいることがわかりましたから、食事がすんで、みんなが食卓（しょくたく）から立ちあがると、そのまま、その妖女は、とばりのかげにかくれていました。それは、こうしてかくれていて、そのおばあさんが、なにをたくらもう

とも、じぶんがそのあとに出て、すぐ、そののろいのことばを、うち消すようなことをいって、それをお姫さまへのおくりものにしよう、とおもったからです。

　そうこうするうちに、いよいよ、妖女たちは、それぞれ、お姫さまにおくりもののことばをのべることになりました。なかで、いちばん若い妖女は、お姫さまが世界一美しい人になられますように、といいました。つぎの妖女は、天使のようなおこころがさずかりますように、といいました。三ばんめの妖女は、王女のたちいふるまいの、やさしく、しとやかにありますように、といいました。四ばんめの妖女は、たれおよぶも

ののないダンスの上手（じょうず）になられますように、といいました。五ばんめの妖女は、小夜啼鳥（さよなきどり）のような、やさしい声でおうたいになりますように、といいました。六ばんめの妖女は、どんな楽器（がっき）にも、名人（めいじん）の名をおとりになりますように、といいました。いよいよおしまいに、おばあさんの妖女の番になりました。この妖女は、さもいまいましそうに首をふりながら、王女は、その手を糸車のつむにさされて、けがをして死ぬだろうよといいました。

　このおそろしいおくりものは、身ぶるいの出るほど、みんなをびっくりさせて、たれもお姫（ひめ）さまのために泣

かないものはありませんでした。そのときです、若い妖女が、とばりのかげから出て来て、とても大きな声で、つぎのようなことばをいいました。

「いいえ、王様、お妃様、だいじょうぶ、あなたがたのだいじなおひいさまは、いのちをおなくしになるようなことはありません。もっとも、わたくしには、この年よりのいったんかけたのろいを、のこらずときほごすまでの力はございません。おひいさまは、なるほど手のひらに、つむをおつきたてになるでしょう。けれどそのために、おかくれになるということはありません。ただ、ぐっすりと、ねこんでおしまいになって、

それは百年のあいだ、目をおさましになることがないでしょう。そして、ちょうど百年めに、ある国の王子さまが来て、おひいさまの目をおさまし申すことになるでしょう。」

二

王様は、妖女（ようじょ）のおばあさんのよげんしたさいなんを、どうかしてよけたいとおもいました。そこで、その日さっそく、国じゅうにおふれをまわして、たれでも、糸車につむをつかうことはならぬ。家のうちに、一本

のつむをしまっておくことすら、してはならぬ。それにそむいたものは死刑（しけい）にすると、きびしくおいいわたしになりました。

　さてそれから、十五六年は、ぶじにすぎました。あるとき、王様とお妃様が、おそろいで、離宮（りきゅう）へ遊びにお出かけになりました。そのおるすに、ある日、若い王女は、お城の中をあちこちとかけあるいておいでになりました。するうち、下のへやから上のへやへと、かけあがって行って、とうとう塔（とう）のてっぺんの、ちいさなへやにはいりました。見ると、そこには、人のよさそうなおばあさんが、ひとりぼっちですわっていて、

つむで糸をつむいでいました。このおばあさんは、つむを使ってはならないという、きびしい王様のおふれを、つい聞かなかったものとみえます。
「おばあさん、そこでなにをしているの。」と、お姫さまはたずねました。
「ああ、かわいいじょッちゃん、わたしゃ、糸をつむいでいるのだよ。」と、おばあさんはいいました。
このおばあさんは、王女がたれだか、すこしも知らないようでした。
「まあ。」と、王女はいいました。「なんてきれいなんでしょう。それはどういうふうにやるものなの。あた

しにかしてごらんなさいな。あたしにもできるかどうか、やってみたいから。」

お姫さまは、こういって、そのつむを、手にとりましたが、それは持ち方がいけなかったのか、たいへんあわてて、ぶきような持ち方をしたのか、それとも、あのわるい妖女(ようじょ)ののろいのことばが、いよいよしるしをあらわすときになったのか、とたん、つむは、いきなり王女の手にささって、王女はばったり、そこに倒(たお)れてしまいました。

人のいいおばあさんは、あわてて人を呼びました。みんな、お城のそこからもここからも、かけ出してき

ました。お姫さまの顔に水をそそぎかけたり、ひもをといて着物をゆるめたり、手のひらをたたいてみたり、ハンガリア女王の水という薬で、こめかみをもんだり、いろいろにしてみても、王女は息をふきかえしませんでした。

　さて、王様はこのさわぎを聞いて、さっそくかけつけておいでになりました。そうして十五年むかしの妖女（ようじょ）のよげんを思い出しながら、やはりこうなるうんめいだったことをさとって、お姫さまを、そのまま、お城のなかでも、いちばん上等のへやにつれて行かせ、金と銀のぬいとりをした、［＃「、」は底本では「。」］きれ

いなねだいの上にねかしました。

　ねだいの上に、すやすや眠っておいでになるお姫さまの、美しさといってはありません。それはちいさな天使だといってもいいくらいでした。人ごこちがなくなっていても、生きているとおりの顔いろをしていて、ほおは、せきちく色をしていましたし、くちびるは、さんごをならべたようでした。目こそつぶってはいますものの、かすかに息をする音は聞こえます。それで、王女が死んでいないということがわかったので、まわりについている人たちは、よろこんでいました。

　王様はそこで、やがて人が来て、目をさまさせるま

で、しずかにねかしておくようにと、きびしくおいいつけになりました。

　さて、王女を百年のあいだ眠らせることにして、やっと、あやういいのちをとりとめた、あの心のいい妖女は、ちょうどこのさわぎの起こったとき、一万(まん)二千里(り)はなれた、マタカン国に行っていましたが、その使っているこびとから、この知らせをすぐうけとりました。そのこびとは、『七里とびの長ぐつ』といって、ひとまたぎに七里ずつあるく長ぐつをはいて、かけて行ったのです。それで、妖女(ようじょ)はさっそくそこを出て、竜(りゅう)にひかせた火の車に乗ると、ちょうど一時間で、王様のお

城につきました。

王様は、お手ずから、妖女を馬車から助けおろしました。妖女は、王様のなさったことを、すべてけっこうですといいました。でも、たいへん先のことのよく見える妖女でしたから、百年ののちに、お姫さまがせっかく目をさましても、この古いお城の中に、たったひとり、ぽつねんとしているのでは、どうしていいか、わからなくて、さぞお困りになるだろうと思いました。

そこで、なにをしたでしょうか。妖女は、魔法（まほう）の杖（つえ）をふるって、王様とお妃をのぞいては、お城のなかの物のこらず、それはおつきの女教師（おんなきょうし）から、女官（じょかん）から、

おそばづきの女中（じょちゅう）から、宮内（くない）官、表役人（おもてやくにん）、コック長、料理番（りょうりばん）から、炊事係（すいじがかり）、台所ボーイ、番兵、おやといスイス兵、走り使いの小者（こもの）までのこらず、杖（つえ）でさわりました。それから、おなじようにして、べっとうといっしょに、うまやでねている馬も、裏庭に遊んでいるむく犬も、お姫さまのねだいの上で眠っているお手飼（がい）の狆（ちん）までも、みんな魔法の杖でさわりました。

　魔法の杖でさわると、すぐ、たれもかれも、なにもかも、たわいもなく眠りこけてしまって、お姫さまが目がさますまでは、けっして目をさましませんし、お姫さまに用事ができれば、いつでも目をさまして、御

用をつとめるはずでした。なにもかも眠ってしまったといって、それはかまどの前の焼きぐしまでが、きじや、やまどりの肉をくしにさしたまま、やはり眠ってしまいました。これだけのことが、みんな、ほんの目(ま)ばたきひとつするまに、できあがってしまいました。妖女(ようじょ)というものは、まったくしごとの早いものですね。

　さてそこで、王様とお妃とは、お姫さまのひたいに、そっと、やさしくほおずりして、お城から出て行きました。そうしておいて、たれもお城に近づくことはならないという、きびしいおふれを、また国じゅうにまわしました。

でも、そのおふれは、わざわざ出すまでもありませんでした。なぜというに、十五分とたたないうち、お城をとりまわしている園（その）の中に、たくさんの高い木やひくい木が、もっさりと茂（しげ）りだして、そのあいだには、いばらや草やぶが、びっしり鉄条網（てつじょうもう）のようにからみついてしまいましたから、人間もけだものも、それをくぐってはいることはできなかったからです。

　そういうわけで、しばらくすると、そとから見えるものは、お城の塔（とう）のてっぺんだけになりました。それも、よほど遠くにはなれてでなければ、見えないのです。これも、妖女のみごとな、はなれわざだったこと

がわかりました。こうして、王女は眠っているあいだ、たれひとりおもしろ半分、のぞきにくることもできないようになったのでございます。

三

さて、百年は夢のようにすぎました。そのじぶん、その国をおさめていた新しい王様の王子が、ある日、眠る森の近くを通りかかりました。

この王子は、眠っている王女の一族が、とうに死にたえて、そのあとに代って来たべつの王家の王子で、

その日はちょうど、そのへんに狩（かり）に出かけて来たかえり道なのです。それで、遠くからお城の塔をみつけると、あの森の中にある塔はなんだといって、おそばの者にききました。

みんなは、てんでん、じぶんの聞いているとおりをこたえました。

なかのひとりは、あれは、ゆうれいが出るというひょうばんの、古い荒城（あれじろ）だといいました。

すると、またひとりが、あれはこの国の魔法使（まほうつかい）や、わるいみこたちが、夜会（やかい）をする場所だといいました。

そのなかで、わりあい、おおぜいのもののいうとこ

ろでは、あれは昔から人くい鬼の住んでいるお城で、ちいさなこどもをつかまえては、みんなあそこへさらって行って、それで、たれもあとからついてこられないように、あのとおり、じぶんだけ通って行ける森をこしらえて、その中でゆっくりたべるのだというとでした。

王子は、このうちのどれを信じていいか、わからないので、まよっていますと、そのとき、ひとり、この土地に古くからいる年よりのお百姓（しょう）が、こういいました。

「王子さま、失礼（しつれい）ではございますが、わたくしが五十

年も前、父から聞きました話では、――その父はまた、もとは、じじいから聞いたのだと申しますが、――このお城の中には、それはそれは美しい王女のお姫さまが住んでおりまして、もう百年のあいだ、ずっと眠りつづけたあと、ちょうど百年めに、ある王様の王子が来て、目をさましてくださるのを、待っているのだということでございます。」

若い王子は、この話を聞くと、からだじゅうに、かっとあつい血がもえあがるようにおもいました。ぜひとも、このめずらしいできごとのおさまりを、自分でつけてしまわなければとおもいたちました。美しいお姫

さまをさずかるうえに、たれもはいれない魔法のお城をきりひらく名誉が、自分のものになるとおもうと、もううしろからからからだを押されるような気がして、さっそく、そのしごとにかかろうと決心しました。

そこで、王子は、森にむかってずんずん進んでいきますと、大きな木も低い木も、草やぶもいばらも、みんな道をよけて通しました。その広い道をどこまでも行きますと、やがてその奥にあるお城に着きました。

ところで、すこしびっくりしたことには、ふとふりかえってみると、家来に、ひとりもついてくるものがないのです。なぜというに、王子がはいるといっしょ

に、すぐ森の口がしまってしまったからです。けれども、王子はかまわずに、ずんずん進んでいきました。若いやさしい、そして火のようにあつい心をもった王子は、いつも勇気のあるものです。

　王子はやがて大きな広い庭に出ました。そこでまず見たものは、どんなこわいもの知らずでも、ぞっとして、骨までこおるようなものでした。なにもかも、気味（きみ）のわるいほど、しいんとしずまりかえっていました。そこにも、ここにも、目に見えるものは、人間や動物が、みんな死んだもののように、ぐんにゃり手足をなげ出しているすがたでした。けれども、そこに

立っている、おやといスイス兵の鼻いきは、ぷんとお酒くさいし、ぽおっと赤いほほをしているのを見ても、この連中（れんじゅう）は、みんな眠っているのだということが、すぐ分かりました。しかも、その手にもった茶わんには、まだぶどう酒（しゅ）のしずくがのこっているので、なかまとお酒（さか）もりのさいちゅう、眠ってしまったのだということまで知れました。

　王子はそれから、大理石（だいりせき）をしきつめた大ろうかを通って、かいだんの上まで行って、番兵のつめているへやにはいりますと、番兵らは鉄砲（てっぽう）を肩にのせてならんだまま、ありったけの高いびきをかいてねていまし

た。それからまた進んで、いくつかのへやを通って行きますと、どのへやにも、紳士（しんし）たちや貴婦人（きふじん）たちが、立っているものも、腰をかけているものも、みんな、たわいなく眠りこけていました。とうとう、おしまいにはいったのは、のこらずが金ずくめのきらきらしいへやでした。そこに、りっぱなねだいがすえてあって、四方のとばりのこらず、あげた中に、それこそこの世にふたつとない美しいものがあらわれました。たぶん十五六くらいの年ごろのお姫さまが、こうごうしく光りかがやくすがたで、眠っていたのです。あっと、おどろきながら、王子はふるえる足をふみしめふみしめ、

その前にひざまづきました。

さあ、これで魔法の力もいよいよつきたのでしょう、王女は、ふと目をさましました。そして、なんともいえないやさしい目で、じいっと王子のほうをながめました。

「王子さま、あなたでございましたの。」と、お姫さまはそういって、にっこりしました。「ずいぶん待っていただきましたのね。」

王子は、このことばを聞くと、なんといって、心のよろこびをいいあらわしていいか、分かりませんでした。王子は、じぶんのことよりも、どんなにかよけい

に、お姫さまのことを、おもっているか知れないといいました。ふたりの話は、話すというよりも、泣いているといったほうがいいほど、ただもう、しどろもどろなものでした。ことばは、よどみがちでしたが、やさしい心のいずみは、かえって、いきおいよく流れ出しました。

それに、王子のほうは、きまりはわるいし、ただおどろいているばかりなのに、王女のほうは、なにしろ百年のあいだ、妖女(ようじょ)がおもしろい夢(ゆめ)を、それからそれと見どおしに見せていてくれたのですから、いくら話しても話しても、話のたねがつきるということがない

のです。ですからふたりは、かれこれ四時間もぶっとおしに話しつづけていて、そのくせ話したいことの半分も話しきらずにいました。

　そうこうするうち、お姫さまといっしょに、お城のそこでもここでも、みんなが目をさましました。たれもかれも、じぶんじぶんのしごとを思い出しました。ところで、みんなは、さしあたり、ほかに、くろうもくったくもありませんでしたから、まっさきにおなかがすいて、倒（たお）れそうにおもいました。女官頭（がしら）は、ほかの人たちとおんなじに、ひどくおなかがへって、がまんできないほどでしたから、だしぬけに大きな声で、

お姫さま、お夕飯のおしたくができましたと、申しあげました。王子は、王女のお姫さまを助けて立ちあがらせました。お姫さまは、ずいぶんりっぱなふうをしていましたが、なにしろそれは百年まえにはやった、王子のひいおばあさんの着物とおなじようだということを、さすがにお姫さまにむかっていうことは、えんりょしていました。いくら流行おくれなふうはしていても、それがために、王女の美しさにも、かわいらしさにも、いっこう、かわりはなかったのですからね。

さて、ふたりは、鏡の間に出て行きました。そこで夕飯の食卓について、王女づきの女官たちがお給仕

に立ちました。そのあいだ、バイオリンだの、木笛（きぶえ）だのが、百年まえの古い曲（きょく）をかなでました。それは、百年まえの古い曲にちがいありませんでしたが、りっぱな音楽（おんがく）であることにかわりはありませんでした。

食事がすむと、時をうつさず、大僧正（だいそうじょう）は、ふたりをお城の礼拝堂（れいはいどう）へ案内（あんない）して、ご婚礼（こんれい）をすませました。女官頭（がしら）は、ふたりのためにとばりをひきました。

四

ふたりはその晩、ほんのわずかしか眠りませんでし

た。王子は、あくる朝、王女にわかれて町へかえりました。おとうさまの王様が、待ちこがれておいでになるところへ、かえって行ったのでございます。

王子は、狩（かり）［＃「狩（かり）」は底本では「狩（かり）り」］をしているうち、森の中で道にまよって、一軒（けん）の炭焼小屋にとまって、チーズや黒パンをたべさせてもらったことなどを話しました。おとうさまの王様は、人のいい人でしたから、王子のいうことをほんとうになさいました。けれど、おかあさまのお妃は、もうさっそく、王子には、およめさんができていることを、おさとりになりました。

それから二年たちました。王女には、ふたりもこどもが生まれました。上の子は女の子で、これは「朝」という名でした。下の子は男の子でこれは「昼」という名でした。そのわけは、弟のほうが、ねえさんよりも、ずっとりっぱで、美しかったからでございます。

それからまた二年たって、王様がおかくれになって、王子が、新しい王様の位につくことになりました。そこではじめて、天下はれて、王女と結婚のしだいを、国じゅうに知らせました。そうして、りっぱな儀式をととのえて、あらためて、眠る森から、お姫さまをお迎えになりました。王女はふたりのこどもを両わきに

のせ、美しい行列の馬車をそろえて、王様のお城に乗りこみました。

美しいりっぱな、いい心をもったあいてを、待っているということは、むずかしいことです。でも、待つことによって、幸福はましこそすれ、へるということはありません。

底本：「世界おとぎ文庫（イギリス・フランス童話篇）妖女のおくりもの」小峰書店
　　　１９５０（昭和25）年5月1日発行
※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。
※底本では見出し「一」はページ上部に挿し絵があるため、他の見出しと字下げ分が異なっていましたが、統一しました。
入力：大久保ゆう
校正：秋鹿

２００６年１月21日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。